

専修大学
創立130年
記念企画
第02回

日本を変える、
世界を動かす!

社会知性の チカラ

The Potentiality for "Socio-Intelligence"

激動の時代に解き明かす教育の本質

不況からの脱却は、 価値の創造にあり!

激動の現代、専修大学が掲げる「社会知性」に込められた真の教育のあり方とは……。ビジネス社会で必要とされる知力とは何かについて、ビジネスの最前線で活躍する専修大学の卒業生10人に話を聞いた。

「教えない教育」こそが個々の能力を高め 自立心のある若者を育てる

大学で得たことは何か? あらためて考えると、それは単なる知識などではなく、自分でよく考えて自分の可能性を引き出す「自立・自主性」だったと思います。私なりに解釈すれば、それは「教えない教育」です。「教える育てる」ことが教育であり、「教えない教育」という言葉に矛盾を感じる人も多いでしょう。これを説明するには、私が社長に就任したときの話からする必要があります。

当社は、コカ・コーラウエストグループの製造工場から倉庫、各支店に製品を運ぶ物流業務を行ないます。

私が社長に就任した当初、販

売物流業務もあり、年間四五件の交通事故を起こすなどひどい状態でした。事故をゼロにするにはどうするか。私の試行錯誤が始まりました。

まず取り組んだのは、安全運転に関する講習。交通安全のビデオなどを使った研究会や危険予知トレーニング、朝礼では安全の唱和も行ないました。ところが、知識による事故防止の対策、つまり「教える教育」は、まったく効果がなかったのです。

自ら考え行動すれば 可能性は無限大に

そこで、私は方向転換しました。それが専大で得た、「教えない

教育」です。自立して自らが考え、行動するよう意識を養えることです。私がまず社員たちに徹底したのは「クルマを大切にすること」。クルマを大切に扱うという意識だけです。

少しでも汚れたら洗車する。運転席の回りも、整理整頓してきれいな状態を保つ。同時に、エコドライブを推進し、社員一人ひとりに「カイゼン案」を提案させるようにしました。

ガソリンを満タンにしない。高台のお客様の訪問は、積み荷が軽くなってから回るようルールを考えるなど、じつにさまざまなアイデアが出ましたね。

クルマをきれいにし、エコドライブを考えることで、クルマに愛着が生まれ、みんなが大事に扱うようになりました。社員

の意識が変わったことで、翌年は事故が一件に、二年目は六件、三年目には三件にまで減り、事故率が2%以下になりました。

しかも「教えない教育」の効果で、社員一人ひとりが服装や身なりもきれいに整えるようになり、お客様への挨拶や応対も向上。「人はここまで変わるものか」と、私自身が驚かされたほどです。

人の持つ向上心や可能性は無限大です。徳を育て自ら考え、行動するきっかけを与え、才能を引き出すこと。それが、真の教育なのです。

コカ・コーラウエスト ロジスティクス 相談役 河辺捷義

(1966年経済学部卒業)

山口県出身。
66年に旧山陽コカ・コーラボトリング(現コカ・コーラウエスト)入社。
人事部長、営業企画部長などを経て
02年にコカ・コーラウエストジャパングループ上席執行役員、
コカ・コーラウエストロジスティクス代表取締役就任。
08年から相談役に。





大学の4年間で 生涯持ち続ける 仕事への志を見つける

ゴール 代表取締役

関口秀之

(1991年経済学部卒業)

栃木県出身。91年に電通ワンダーマン入社。日本オラルクなどを経て、05年にゴールを設立。一般社団法人日本スポーツ放映飲食店協会理事。09年3月早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修了。

13

大 学に入学した当時は、住み込みで新聞配達のパイトをしていた。毎朝三時半に起床し、授業が終われば夕刊を配りに戻るという生活を一年半ほど続けていましたね。

「自分の大学生生活はこのままでいいのか?」という思いがありました。そんなとき、私の将来を決定づける出来事がありました。それがオーストラリアンフットボールとの出会いです。オーストラリアで初めて観戦したのですが、とてもエキサイティングで、一二十万人もの観客が熱狂して、すごい盛り上がりでした。

たね。私もすっかり興奮して、帰国後に同好会(現「専修パワーズ」)をつくったほどです。

現在、スポーツと環境、フィード、地域振興を柱としたコンサルティングやプロデュースが主な業務です。そして、「人を感動させること」が、今なお私が志している仕事の基本です。その原点は、専大時代のオーストラリアンフットボール。専大生の皆さんも、就社ではなく就職の時代といわれる今、仕事のスキルや能力を高めることはもとより、なにか一つ志を持って仕事に臨んでほしいですね。



目標を忘れず 信念を持ち続けられ やがて道は開ける

九電工 取締役常務執行役員

谷口筆敏

(1971年法学部卒業)

佐賀県出身。71年、九州電気工事(現・九電工)入社。宮崎支店長、常務取締役電力本部長などを経て、現在に至る。人材開発・人事労務担当としても、大学で得た法学の知識を生かして、その手腕を振るう。

12

学 生時代を基準に置けば、専大での四年間は、私にとって最も充実した時間でした。大学に入った以上、とことん学ぶつもりでありましたので、授業もほとんど休まず出席。また、志を共にする多くの友を得ることもでき、仲間と一緒に東都大リーグで、神宮球場に応援に行ったのも、とてもいい思い出ですね。

九州電気工事(現・九電工)では、営業所の庶務として資料の調達や配送という仕事からスタートしました。「目標を忘れず、信念を持ち続けられ、やがて道

は開ける」。この言葉を胸に、汗にまみれ、歯を食いしばって仕事をしていましたね。

「大学で得た知識が実社会で役立つのか?」という言葉に耳にしますが、いずれ役立つときが来ると断言できます。すぐにではないかもしれませんが、上の立場になれば「あのとき、ゼミの教授はこう話していた」ということが、ボツと出てくるもの。在学生は、学生時代どん欲に学び、社会人になっても、果敢に挑戦する心を忘れないでほしい。また、大学にはスポーツでの古豪復活を望んでいます。



インテリジェントウェイブ
代表取締役社長執行役員

山本祥之

(1978年経営学部卒業)

北海道出身。85年、カードビジネスをサポートするシステムやネットワークの開発、販売を行なう同社に入社。05年、社長就任。現在は、コンピュータソフトウェア協会常任理事も兼任。

在学中、図書館にこもって本を開き、ひたすら勉強をしたことを覚えています。そこで、人に頼らず、自分から学び取る自学自習の大切さを実感。物事を深く考え、悩み、そして本質をとらえる。それが、社会、人間関係そして自分自身を理解することになるのだと思っています。



千葉銀行 常務取締役

伊東 正

(1976年商学部卒業)

東京都出身。在学中は小澤康人ゼミで財務会計を学ぶ。76年千葉銀行入社。地域の総合金融サービスの確立を目指すと同時に、社会貢献活動にも積極的な同社で、08年、常務取締役に就任。

片道2時間30分の遠距離通学をし、授業にゼミ、税務会計研究会、アルパイトと、さまざまな活動に取り組む、大変忙しかったですね。なかでも、積極的に取り組んだゼミ活動が一番の思い出です。よき師、友人、先輩に恵まれ、地道に努力していくことの大切さを学びました。



クリエートメディック 最高顧問

相川文雄

(1967年経営学部卒業)

滋賀県出身。医療用機器の研究、製造、販売を行なう、クリエートメディックの創業者。同社は84年、故・本田宗一郎氏の研究開発型起業育成センターより融資を受け、93年に東証1部上場。

学生時代から、「会社を創る」が目標でした。そんな思いで、グリーククラブの創設、経営学部創成期のゼミナール連合会の創設活動など、現会社名にもなっている「創る」ことに意欲的に挑戦してきました。目標を具体的に持ち続けた結果が現在につながっていると感じています。

ビジネスの 最前線で 創造し続ける —経験から学ぶ



オリエンタルランド
ユニットマネージャー

川崎信行

(2000年商学部卒業)

東京都出身。飯田謙一ゼミで、「日本企業の海外経営と国際経営」を研究。00年、東京ディズニーランドなどを運営するオリエンタルランドに入社。商品販売部のユニットマネージャーを務める。

韓国・中国・台湾など、さまざまな価値観を持つ留学生が在籍するゼミで、ゼミ長を務めました。「メンバーの個性・価値観を尊重し、目標に向かい、最高のチームを築き上げる」。このゼミ経験は、現在でも私自身が目指す理想的なリーダー像の基礎として、役立っています。



ソニマ 代表取締役社長

明石康弘

(1996年経済学部卒業)

埼玉県出身。作間逸雄教授のゼミで経済学を学ぶ。96年、亜土電子工業入社。01年にデジソニック(現・ソニマ)設立。DVDなどの宅配レンタルで急成長。

部員120人というテニスサークルに所属、3年から支部長を務めました。みんなが安心してサークルに参加できるよう努め、責任感や協調性を習得しました。作間ゼミでは、経済の動きを数学的にひも解くことで、論理思考を身につけるなど、仕事で不可欠なものになっています。



ヤマト運輸 兵庫主管支店長

長谷川真也

(1984年経営学部卒業)

静岡県出身。田口冬樹ゼミで流通論を学ぶ。通信販売をテーマとした卒論を執筆中に通販の要である、運送業に興味を持ち、同社に入社。九州および関東の支店長を経て、現在に至る。

経営学研究会に所属し、企業の研究や、他大学との討論会などに積極的に参加しました。本当に人が好きで、多くの人とお酒を飲んでは意見を交わし合いました。その思いは変わらず、今は管理職という立場で、人と触れ合い、人とともに生きることの楽しさを実感しています。



ものづくり研究所 代表取締役

北條 規

(1979年経済学部卒業)

新潟県出身。アパレル商社を経験後、82年通販のSTEILAR C.K.M.の創業期より参画。00年、JASDAQ上場。08年、ものづくり研究所設立。全国地域資源の商品開発などを手掛ける。

正村公宏ゼミは、議論好きで情熱的な先輩が多く、必ず毎週数冊の課題書籍を読んで理解して出席する必要がある厳しいゼミでした。先生からは経済政策の根底にある人間愛を学びました。なかでも環境・福祉・地域・地場産業に関する精神性は、今の仕事のなかで生かされています。